

● 趣旨説明 ●

〔 自由・進取の精神と反骨の系譜 —早稲田大学における伝統の創造— 〕

安 在 邦 夫

(自由民権研究所長／文学学術院教授)

ただいま研究機構機構長ならびに総長から本日の研究成果報告会に触れたお話がありましたので、改めて私がお話を申しあげる必要もないように思いますけれども、シンポジウムの企画の責任を担いました者と致しまして、本日開催の研究成果報告会に関し、簡単に趣旨説明をさせていただきたいと存じます。

周知のように、本年早稲田大学は創立125周年を迎えました。このことは学苑にとり、本年は特別な意味を有していることを示しております。すなわち、学祖大隈重信の「人生125年」説に因み、今年早稲田大学は「建学第2世紀」という新たな世紀を迎えることになったわけであります。そこで総合研究機構では、第3回目を迎えました研究成果報告会を、大学建学の理念やその来し方を考え、検証して見ることはきわめて重要で意義のあることであると考え、この課題に取り組むことに致しました。しかし、いざ具体的に組み立ててみようと致しますと、報告主題の設定や構成など、大変難しい問題であることを、正直痛感致しました。すなわち、時間的経緯とその中で生じたトピックスをどのように連動・連結させれば、学苑の歴史的歩み考え得るか、という問題であります。

種々検討の末、まず第一に、建学の理念をキーワードで表現した場合如何なる語が用いられるのかという点に思いを致しました。周知のように学苑は、学問の独立・学問の活用・模範的国民の造就を基本理念とし開校しました。この学問的風土の醸成、理念の達成には、記すまでもなく近代的価値としての自由の確保・存在を前提としました。そしてそのためには、進取という意志と精神が求められました。しかし、要請されたのはそれに止まりませんでした。「明治14年政変」という歴史的経緯の中での学校創設であったことを考えれば、必然・不可避なことでありましたが、官憲の理不尽な干渉と弾圧に決して屈しないという気骨を有することが関係者には不可欠でした。すなわち、時勢に阿らず埋没せず、自らの意思・主義を貫くという反骨の精神もまた、学苑の存立と発展のためには欠かせないものでありました。反骨という語には、在野・庶民性などのほか、批判の精神をもって現実を直視するという意が含まれていると思います。このような点を勘案し、「自由」・「進取」・「反骨」を建学の精神のキーワードとし、関係者はこれをどのように自覚し、伝統の創造のために努めてきたのかを検証することに致しました。

次に考えましたのが、報告の対象とする時期の設定についてです。すなわち、前掲の問題を時系的にどのように検討していくのかという問題です。ここでは早稲田大学全体の歴史を勘案しつつ、早稲田大学の前身東京専門学校が開校された(1882年)1880年代、東京専門学校を早稲田大学と改称した(1902年)1900年前後、そして大学令の施行(1919年)に伴い、少なくとも帝国大学と同格の大学として扱われるようになった時期=1920年代の3期に分けることが妥当・適切であると考えました。この時期設定は、ある意味では「早稲田大学の歴史」にこだわった面もありますが、しかしそれに止まらないこと、各期が日本の近代史の中でいずれも画期をなす重要な時期であり、学苑と時代状況との関わりを示すものとしてもきわめて有効なものであると思惟するに至りました。この点について少しく触れておきますと、次のような

ことであります。

第1の時期、東京専門学校創設の時期=1880年代は、言うまでもなく自由民権運動の展開期で、自由・民権という近代的理念が飛び交った時期であったこと、第2の時期、早稲田大学改称の時期=1900年代は、資本主義的な生産様式、近代的な産業が発展するとともにそれに付随して社会問題が噴出した時期であったこと、そして第3の時期、大学令に基づく大学の新たな活動が始まった時期=1920年代は、いわゆる大正デモクラシーからファシズム期へ傾斜してゆく時に当ることなどで、各期における大学の存在形態に深く関心が寄せられるということでもあります。

以上の問題から、第3に、次のような問題設定が妥当・適切であると考えました。まず第1期に関しましては（報告Ⅰ）、東京専門学校の開校の経緯と入学学生の志・入学後の活動の検証で、「自由民権運動と東京専門学校の開校」、「初期東京専門学校入学生の志と活動」という問題を考えることに致しました。第2期に関しましては（報告Ⅱ）、社会状況の変容、社会問題の噴出・顕著化に対し、学苑関係者はどのように対応し、何を後世に残したのかという問題の検証で、「社会問題の顕在化と早稲田大学」、「『足尾鉍毒事件』と大学・卒業生・学生の動向」というテーマを設定致しました。そして第3期に関しましては（報告Ⅲ）、大正デモクラシーと表現される諸運動の展開が学苑に及ぼした影響、および不安な社会へ傾斜していく政治・社会状況の中で、時代への警鐘が学苑関係者からどのように成されたのかという問題の検証で、「男女共学への歩みと実践」、「湛山思想の真価」という題で検討することに致しました。以上の報告に関しましては少し欲張り過ぎた感じも致しますが、報告Ⅰにつきましては、学校創設者・運営者側とそこに入学し学ぶ学生の立場から、報告Ⅱにつきましては、グローバルとローカルという視点から、報告Ⅲにつきましては、人権・平等という時代の思潮を実践と理念という視座から考えること、すなわち異なった視点を組み合わせて考察するということとし、それぞれ二人の報告者を立てることに致しました。

最後に、本日の報告を担っていただく方々、その所属の機関・団体について述べておきたいと思えます。繰り返しになって恐縮ですが、ご案内にございますように今日のシンポジウムは総合研究機構の研究成果報告会であります。しかし、大学創立125周年記念という性格のことも考え、総合研究機構と関わりのある自由民権研究所・東アジア法研究所（所長浅古弘大学院法務研究科教授）・ジェンダー研究所（所長小林富久子教育・総合科学学術院教授）のほかに、石橋湛山記念財団（理事長石橋省三氏）・初期社会主義研究会（代表山泉進明治大学教授）・早稲田大学大学史資料センター（所長吉田順一文学学術院教授）など、広く他の機関、学会のご協力、お力添えも仰ぐことに致しました。

まず、報告のⅠに関しましては、総合研究機構に属します自由民権研究所から同研究所客員研究員で現在宮内庁書陵部主任研究官の任にあります福井淳氏と、早稲田大学大学史資料センター研究調査員の真辺将之氏にお願い致しました。報告Ⅱの初期社会主義問題につきましては、初期社会主義研究会の会員で政治経済学術院教授の梅森直之先生にお願い致しました。また足尾鉍毒問題に関しましては、法律畑からの議論が比較的希薄であるという状況を鑑み、総合研究機構の東アジア法研究所にお願いし、札幌学院大学教授の小沢隆司先生にご報告いただくことに致しました。報告Ⅲの男女共学問題につきましては、総合研究機構のジェンダー研究所にご担当いただくこととし、同研究所の客員研究員で現在新札幌市史編纂室長の任にあります海保洋子氏に、また石橋湛山の思想につきましては、『石橋湛山の思想史的研究』（早稲田大学出版部 1992年）で石橋湛山記念賞を受賞され、現在石橋湛山研究の牽引者となって活躍中の岡山大学教授姜克實先生にご報告いただくことに致しました。

本日の報告と問題提起・議論が、これからの早稲田大学、そして時代を担う多くの学生さんに咀嚼され、自由・進取・反骨の精神が受け継がれ、新世紀を迎えた学苑のさらなる伝統の創造に資すれば幸いです。以上、まことに拙いお話になりましたが、本日開催の第3回総合研究機構研究成果報告会の趣旨説明とさせていただきます。

「自由・進取の精神と反骨の系譜—早稲田大学における伝統の創造—」

本年、早稲田大学は創立125周年を迎える。学租大隈重信の「人生125年」説に因み、本学苑において今年、「建学第1世紀」を終え新たな世紀に入るという格別の意味を有している。このような年に当り、建学の理念の来し方を考え検証して見ることはきわめて重要で意義のあることと思われる。そこで総合研究機構では、第3回研究成果報告会を表題のように定め、この課題に取り組むことにした。報告主題の設定・構成に際して留意した点は、以下の通りである。

第一に、建学の理念のキーワードを何にするかという問題である。周知のように学苑は、学問の独立と活用、進取の精神を基本とし開校した。この学問的風土の醸成には、記すまでもなく近代的価値としての自由の存在を前提とした。しかし、不可欠であったのはそれに止まらなかった。「14年政変」という歴史的経緯を考えれば必然でもあったが、官憲の理不尽な干渉と弾圧に決して屈しない気骨が関係者に求められた。すなわち、時勢に安易に迎合せず自らの意思・主義を貫く反骨精神もまた、学苑の存立と発展のためには欠かせない問題であったのである。反骨という語には、在野・庶民性などの意も含まれるであろう。このような点を勘案し、「自由」・「進取」・「反骨」を建学の精神を検討するキーワードとすることにした。

第二に、報告に関する対象の時期と主題の設定である。まず時期の設定については、開校の時期（1880年代）、早稲田大学と改称の時期（1900年代）、大学令施行に伴う大学の発展期の三期に分けた。この時期設定は、各期が日本の近代史の中でも画期をなす時期であり、単に学苑の発展という視点に止まらず学苑と時代状況との関わりを示すものとしても有効なものであると考えた。この点に思いを致し設定した主題が、報告Ⅰ：東京専門学校の開校と校風・学生の活動、報告Ⅱ：社会状況の変容と早稲田大学、報告Ⅲ：進取の精神・時代への警鐘、である。各期の報告についてはそれぞれ二人とし、可能な限り多くの角度から触れるように努めた。報告の内容に関しては特に規制せず、各報告者が各期の主題と第一の点に留意しつつ、自由に決めていただくことにした。

なお本シンポジウム開催に当たっては、総合研究機構に関係する自由民権研究所（2007年～2005年に活動）・東アジア法研究所・ジェンダー研究所のほか、石橋湛山記念財団・初期社会主義研究会・早稲田大学大学史資料センターのご協力、お力添えを得た。

本シンポジウムでの報告・討論が、早稲田大学の歴史を振り返り、現況を考え、新世紀を迎えた学苑のさらなる伝統の創造に資すれば幸いである。

安在邦夫（あんざい・くにお）

1939年、三重県生まれ。早稲田大学大学院文学研究科日本史学専攻博士課程単位取得退学。専攻：日本近代史。現職：早稲田大学文学学術院教授。主要著書：『立憲改進黨の活動と思想』（校倉書房、1992年）、『日本の近代—国家と民衆—』（共著、梓出版社、1984年）、『自由民権の再発見』（共編著、日本経済評論社、2006年）。